

①～⑩については、「有馬の城づくり、町づくり 其の巻 -西部編-」をご覧ください。

**⑩通町(長町)**  
久留米城下町のメインストリート。延享2年(1745)、通町に改称。

●田中久重生誕地  
発明家・田中久重は、寛政11年(1799)に通町10丁目のべっ甲細工師の家に生まれた。「からくり儀右衛門」の名で親しまれる。



●十丁目番所  
城下町の出入口の一つ。特に、藩主の参勤交代の時には、家老や有力町人らは、ここで出迎えや見送りを行った。

**⑫榎原小路**  
中級藩士の武家屋敷が立ち並んだ。江戸時代の道筋がよく残る。

●秋葉神社  
8代頼貴の代、天明7年(1787)建立。火災が起らないことを祈願して、火除けの神を祀る。



**⑭鉄砲小路**  
戦時には前線で戦う御先手足軽組が居住した。城下の防御線である寺町に隣接。

●秋葉神社  
8代頼貴の代、天明6年(1786)、建立。近代以降、現在地に移された。江戸時代の神事について記した「秋葉社御神事一式年々引渡日記」(久留米市教育委員会蔵)が伝わる。

●鉤の手の道筋  
防御上、敵に前方を遠見させず、侵攻を遅らせるための工夫とされる。

**⑮寺町**  
城内予定地から移転させた寺と、初代豊氏が福知山から伴った僧が創建した寺などが集められた。城下町の住人の墓地でもある。  
※現在の配置は裏面へ

●本泰寺の山門  
元禄年間(1688～1704)の建築。市内の平唐門形式の山門の中では最も古い。久留米市指定文化財。

●高山彦九郎墓  
尊皇思想家・高山彦九郎は、寛政5年(1793)6月27日に自決し、遍照院に葬られた。国指定史跡。



**⑯通外町**  
延享3年(1746)頃より、通町の外に次第に拡大し、城下町に包摂された。

●五穀神社  
7代頼頼が創建。江戸時代、毎年春・秋に祭礼が行われ、田中久重らの「からくり人形」が人々を楽しませた。



●五穀神社の石橋  
文化3年(1806)、総郡中の寄進で建造。市内では高良山御手洗橋(福岡県指定文化財)に次いで古い石橋。久留米市指定文化財。



## 久留米城下の祭礼



久留米祇園祭礼図・部分(久留米市教育委員会蔵) \*久留米市指定文化財

江戸時代、久留米城下町では3つの大きな祭りが行われていました。水天宮の「川祭り」、祇園社(素戔鳴神社)の「祇園会」、五穀神社の「御繁昌」です。

●川祭り  
筑後川の水神への信仰が起源です。久留米城下に集められた物資は、川港である瀬下から出されて若津港(大川市)で大型帆船に積み替えられ、瀬戸内海を渡って大坂まで運ばれました。そうした水運の発展に伴って、海上交通の安全が祈念されるようになりました。

●御繁昌  
五穀神社の賑わいを生み出すため、藩が境内での芝居や見物物を許可したのが始まりです。歌舞伎や謡などの諸芸のほか、久留米町中から様々な作り物(飾り物)が奉納されました。

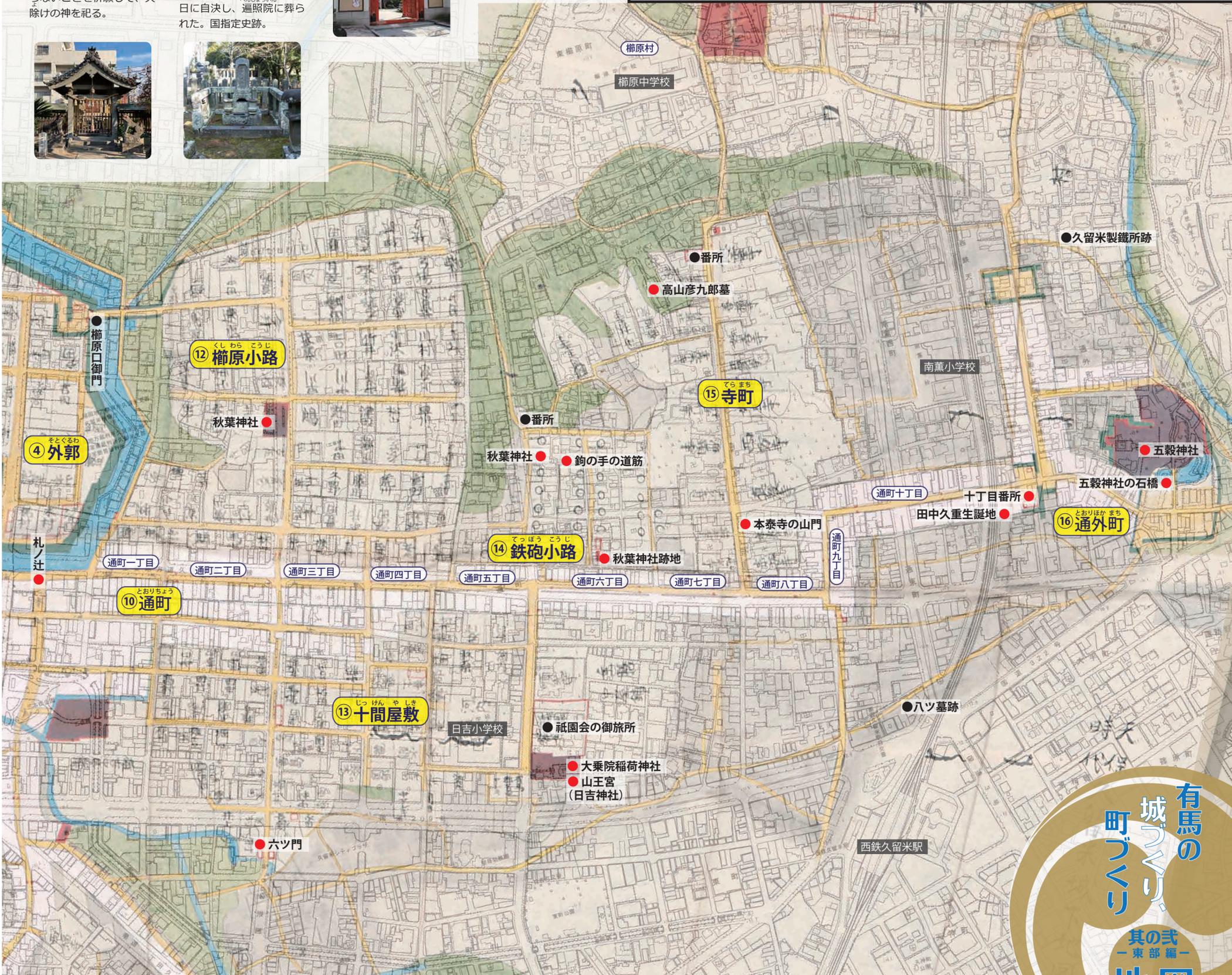
次第にからくりを持つ作り物が増え、若き日の田中久重(からくり儀右衛門)も興行を行い、好評を博しました。

●祇園会  
疫病退散の祭礼で、6月7日に御神幸が外郭の祇園社を出発して始まり、14日に還幸が行われました。天保年間(1831～45)頃の神幸のコースは、大手門前の広場に各町掛の山車が揃い、狩塚橋から城内に入り、祇園社門前の道に並立した後、大手から通町を渡って十間屋敷の御旅所を目指しました。14日の還幸では新町を通りました。

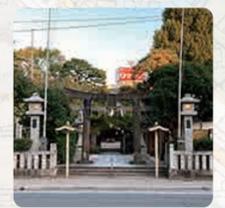
町人総出で行われる賑やかな祭礼で、藩主とその家族は城外の御使者屋や有力な町人の家から御神幸を見物しました。



五穀神社の境内で行われた作り物の演目(〔五穀神社御祭礼つくり物細見の図〕、久留米市教育委員会蔵)



**⑬十間屋敷**  
家老・重臣らの下屋敷が多かった。また2代忠頼が、祇園社の御旅所を置いた。  
●山王宮(日吉神社)  
2代忠頼の代、久留米城二ノ丸整備に伴い、現在地に移された。



●大乗院稲荷神社  
初代豊氏が丹波から久留米城内に移し、篠山神社境内や二ノ丸跡にも伝わる。家老・有馬石見章次が寄進した灯籠が残る。



●六ツ門  
城下町の警固の門があり、明六つ・暮六つ(午前・午後6時頃)に扉を開閉した。



この重ね地図は、現在の地図に「天保時代久留米城下町地図」(久留米市教育委員会蔵)の内容を当てはめ作成したものです。江戸時代の地図は正確な測量によって作られたものではありませんので、現代地図と比較する場合は推定であることをご承知ください。